

今回のヘルヴェッヘの演奏会は口短調だけでなく、マタイ、ヨハネといったバッハの3大宗教曲を短期間に一気にこなしたもので、演奏会の他、ヘルヴェッヘのプレトークも演奏会のチケット購入者へのサービスとして行なわれた(5月28日 すみだトリフォニーホール)。この内容は非常に興味深いものであった。様々な都合により来場することができなかった方もあろうかと考え、自分のメモを元に報告させていただく。

質問事項等の打ち合わせは事前に一切なかったようだ。打ち合わせをしても結局いざ話し始めると打ち合わせとは違ってきてしまうことが常だからという理由だそうだ。そのため、関根敏子氏(国立音大の磯山先生のI教授の部屋に大奥として君臨していらっしゃるお局様として有名な方(<http://www.asahi-net.or.jp/~TX3T-ISYM/neko/fuji-00.htm>))による質問と、最後に聴衆側からの一般質問という形でなされました。通訳はいずれも関根氏による(6月1日の演奏会場で関根氏の姿を拝見しました)。

それでは実際のお話しの順に記させていただく。

ヘルヴェッヘのバッハ体験

教会付き合唱団に所属。S A T Bと年とともにパートは変わった。7歳の時に、ピアノ教師だった母親に連れられてヨハネを聴き(音楽会にはよく行った)、いつか自分もこの曲を指揮したいと思った。

音楽学校の卒業試験(18歳、ピアノ科)のとき、バッハのプレリュードとフーガが課題だったためよく勉強した。

ピアノ科卒業後、オルガンを勉強した。必然的にバッハのものをよく勉強した。このころレオンハルトと出会う。コレギウム・ヴォカールを結成。2年後(20歳)にレオンハルトと共演のチャンスあり。

しかし学校では音楽ではなく、精神医学を専攻した。もっとも今、そのことは特に役立ってはいないが。

1970年代にコープマンと知り合う。ヘルヴェッヘ率いる合唱と、コープマン率いるオーケストラとの共演が10年くらい続く。しかし、お互いの考え方が違ってきて、ヘルヴェッヘはオーケストラを結成し、コープマンは合唱団を結成して互いに独立した路線を歩み始める。

古学の流れについて

従前のモダン楽器の反動としてオーセンティック(古楽器を用いた演奏)というものが出てきた。オーセンティックではアーティキュレーション等の細かいことが重視されてきた。それは楽器奏者が楽団を結成して始めたことだから当然の成り行き。これは第一世代のオーセンティックである。ヘルヴェッヘは第二世代のオーセンティックに属する。第二世代では合唱を重視。歌詞の理解を重視。

バッハは何故このような曲(受難曲や口短調)を書いたか？

作曲家は、ベートーヴェン以降は注文(演奏予定)が無くても書いた。バッハの時代は演奏する必要があると書いて書いた。即ち仕事として書いた。

カンタータは日曜の礼拝(午前7時から11時くらいまでかかる)に使われるため。ちなみ

に、バッハは木曜日まで作曲し、金曜、土曜とパート譜を作成し、実質的な練習はしないで本番に臨んだ。本番直前に速度等について簡単な指示を打ち合わせたのみだと考えられる。

受難曲は復活祭前の聖金曜日の挽歌として書かれた。

口短調ミサは研究者によっても定説はない。この曲の特徴は作曲に時間がかかっていること。バラバラに作曲されていること。最初から一つの曲を作るつもりではなかったのかもしれない。とにかく最後に一曲にまとめた。ポストを得るためだったかもしれないという説もある。

ヘルヴェッヘは今までに、ヨハネは200回、マタイは100回、口短調は50回くらい演奏している。

受難曲は全体(観客も含む)と一体となって作り上げる。全体としての流れがある。

口短調ミサは受難曲とは異なり、全体を作るエネルギーが感じられない。将来的には部分的演奏(たとえばある演奏会ではキリエだけとか)も試みてみたい。

今回、一週間の間に3つの大曲を一度に演奏することについて

このような体験ははじめて。大変だが、短期間に集中することで、マタイとヨハネの異なるところ、或いは逆に同じようなところというのをはっきりと感じることができる。

バッハのすごいところは、誰が聴いてもバッハだとわかるが、各々の曲が個性を持っており、全て異なっているところ。例えば、モンテヴェルディにしても、ビバルディーにしても、シュトラウスにしても、それぞれの作曲家の個性というのはそれぞれ持っているが、どの曲もそれぞれ異なるというわけではない。バッハの場合は、確かにバッハの曲であっても個々の曲が個性を持っている。

例えば、喩えていえば

ヨハネはデューラーの版画のよう、

マタイはレンブラントの絵のよう、

口短調はイタリアの世界(風景?)のよう

口短調は最初に指揮したときにはとても難しく感じられた。それでショスタコービッチとか、その他いろいろな作曲家の曲を勉強した。再度口短調を演奏してみるとリズムは素直だし実に易しく感じられた。

しかし、他の作曲家の曲を勉強することについて注意しておかなくてはいけないこともある。バッハでは、それぞれの演奏者(楽器)がそれぞれのポジションを持っている。例えば、マーラーの曲のように個々の演奏者ではなく、全体としての固まりを作り上げるものの指揮とは異なる。いろいろなものを勉強した結果、バッハの曲をマーラーの曲のように指揮するようになってしまっているといけない。例えば、ジャズを指揮しようとする人はいないでしょう。

ヘルヴェッヘの現在の活動

1/3 がコレギウム・ヴォカール

1/3 が他のオーケストラ(フランスのオーケストラなど)

1/3 がシャンゼリゼ管弦楽団(バロック以後の演奏を目的としてヘルヴェッヘが結成) 来年来日してフォーレとフランクをやる。

今年秋には、バッハ・コレギウム・ジャパン(鈴木雅明)とも共演

後は一般質問だった。私自身、おそらく、ドイツ語を母国語としない人が多数を占めるコレギウム・ヴォカールにおいて歌詞の理解の徹底というのはどのように気を付けて行なっているのかという点について質問してみたいと思っていた。しかし、会場には質問コーナーを待ちかまえていた多数の熱烈な聴衆が一斉に手を挙げ、残念ながら私の質問をする機会は訪れなかった。

聴衆側からの質問内容は、はっきり言って、かなり“オタク”的なものであったと思う。質問についての自らのバックグラウンドについて長々と語られる方もいたが、以下は質問内容のみに絞って記す。

今年の7月にトマス教会でマタイを振るが、どのように配置するのか。

まだ決めていない。現地には一度行って見た。オルガン席(バルコニー)が広く、その両側に配置してステレオ効果を出したい。但しこうすると見えないのでオーガナイザーがいやがるので今後の話し合いによる。また、どのように合唱やオケに指示を出すかというのも問題となる。

このトマス教会でのマタイのチケットを入手できなかったと自己紹介された質問者に対して、ヘルヴェッヘは「中に入ってみられることをお勧めします。コーラスのオーディションを受けてみてはいかがでしょう」と洒落たことをおっしゃったそうだ。

演奏にはどのような版を使用しているか。

決定稿はない。

基本的には新バッハ全集に従う。

普段使う楽譜は20年来使い慣れたもの(持参していた)。それに、新バッハ全集に基づいて訂正を書き込んで使う。他の人も同様にしている。楽譜は高価だから。従って、使っている楽譜はまちまちのもの。

基本的な考え方として、いろいろな修正による合体はしない。これは良くない考える。バッハの意図に戻ることが大切。

通奏低音のコンストラクションは？

オルガン(小)とチェロ 多分、関根氏による注釈(チェロはヘルヴェッヘの奥様が演奏)

チェンバロは使わない。必須でないと考える。昔よくチェンバロが使われたのは、オルガンがよく壊れたせいだと思う。

通奏低音の演奏には一般的には偉大なソリストは向かない(良くない)。全体の中での位置、役割というものがわかっていないといけない。

演奏中はどんなことを考えているか？

演奏に集中している。但し、聴衆と一体となって作り上げるものなので、聴衆の反応(緊張感)により、よりいっそう気合いが入る。日本の聴衆は緊張感があって素晴らしい。フランスや、イタリアといったラテン系の民族と比べて。

古楽器と比べてモダン楽器を演奏するときの注意点は？

古楽器は修得するのに難しく、時間(3倍)もお金もかかる。しかし、自分の知人で双方を勉強してそれぞれに還元している人がいる。できることなら両方勉強するのがよい。

バロック音楽における指揮者の役割とは？

バッハは(その当時の)現代音楽しか演奏しなかった。つまり一つの時代だけ。

現代の演奏家は主に昔のものを演奏する。しかもいろいろな時代のものを扱う。それぞれの時代に対するポイントが違う点が難しい。

バッハの場合、一般的には音程の正確さ、アーティキュレーションの重要性がいわれる。ヘルヴェッヘはこれに加えて修辞学の重要性を強調する。修辞学とは、歌詞の解釈、理解をいう。修辞学の徹底は、歌手のみならず楽器奏者にもいえる。

最後に、ヘルヴェッヘ氏からのメッセージ

バッハの音楽においては、音質、ピッチなどが大切なことはいうまでもない。しかしそれよりもっと大切なことは、受難曲やミサ曲が宗教音楽だということである。現代は楽しみや気晴らしとしての音楽を聞く場合が多いが、バッハの時代には、宗教として、教会で演奏された宗教音楽の本質を忘れてはいけない。

6時半から8時までの予定のところ、質問時間を延長してくださり、8時20分近くまでお話しして下さった。感想としては、淡々と、しかし非常によくお話になる方、という印象だった。質問コーナーでは、質問似たいし、驚くほど丁寧に答えてくださった(最も、関根氏による通訳を介して初めて内容は理解できたのですが)。
